

北のとびら

vol. 106

平成27年10月

特集

石川直樹 インタビュー

カメラを持って歩けば、
見慣れた通学路も
心躍る旅になる

アートの子カラを考える

長原實・スチウレ・エング

人づくり基金

(人づくり一本木基金)

街歩きアート

都市と地域の交流点から吹く

新しいアートの風

[滝川・新十津川]

フォト・エッセイ

前田 司郎

表紙作家の紹介

高橋 あおば



石川直樹 (いしかわ なおき)
(写真家・冒険家)

1977年東京生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。人類学、民俗学などの領域に関心を持ち、辺境から都市まであらゆる場所を旅しながら、作品を発表し続けている。『NEW DIMENSION』(赤々舎)、『POLAR』(リトルモア)により、日本写真協会新人賞、講談社出版文化賞。『CORONA』(青土社)により土門拳賞を受賞。著書に、開高健ノンフィクション賞を受賞した『最後の冒険家』(集英社)ほか多数。

北海道はいろんな場所に行っていますが、特に印象に残っているのは、天売や礼文などの島と、道東です。知床も大好きな場所で、たびたび訪れています。

僕は端っこが好きなんです。島や半島部は、日本列島の端である北海道の、さらに端。海を越えた先に広がる未知の世界を想像させる、わくわくする場所です。知床という日本の最果ては、ユーラシアへの入口でもあり、北方領土やカムチャッカへと繋がる場所でもありません。

——中学生の頃には既に一人旅をし、高校二年生でインドへと出かけた石川さん。現在は、旅や個展などで一年の2/3以上はご自宅を離れているとか。北海道にも何度も訪れているそうですね。

●特集／写真家 石川直樹インタビュー

カメラをもって歩けば、 見慣れた通学路も 心躍る旅になる

北極から南極への人力踏破、七大陸最高峰登頂をはじめ、都市はもちろん大河や大洋などあらゆる場所へと旅してきた写真家の石川直樹さん。

北海道文化財団では2009年から毎年、アート体感教室の講師として北海道に招き、各地で子どもたちとのワークショップを開催してきました。2015年9月、斜里町立朱円小学校で講師を務めた石川さんにお話を伺いました。





す。僕は人類学や民俗学の領域に興味をもつて各地を訪れています。「端」に行くと、世界が繋がっていることが言葉でなく身体でわかってくる、というところがあります。

——2014年以降だけでも、10冊以上の写真集・著書出版。精力的に旅をして作品を発表し続ける一方で、写真塾やワークショップなどの教える・伝える活動も増えていますね。

未知のものとの出会う驚きや、自分の感覚と呼応するように撮影し、その写真を世に問うことを、若い頃から続けてきました。最初の写真集の出版が2003年。「自分はこう撮ってきた、ということ伝える作業もやらなくては」と思い始めたのがここ3、4年のことです。今年は香川、青森、沖縄などで写真ワークショップをやってきました。さまざまな場所でもさまざまな世代の人と交流するというのも、僕にとっては未知との出会いであり、冒険です。

対象者は大人が多いですね。2、3日じっくりと子どもたちに触れ

本当はどこであつても驚きを見つけれられるんです。

僕は通学のプロセスを絵物語にしてみせようとしたのですが、特に低学年の子たちは自由でしたね(笑)。子どもの目にはこんなふうに通学路が見えているんだ、と知ることができました。

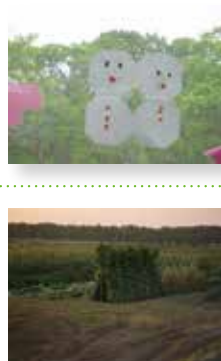
撮影した写真はワークショップ最終日にスライドで発表しましたが、そこに子どもたちが付けた文章も良かった。朱田小学校は今年で閉校になるため、僕が編集して記念になるようなアルバムを作成する予定です。

——今年は11月末から札幌で個展が開かれますね。今後の活動の予定をお聞かせください。

カナダ大使館の企画で、カナダのアルバータ州と札幌の北海道博物館で個展を開きます。また、音楽家の大友良英さんと一緒に継続的に行っている、アジアでの音楽のフィードバックにでかける予定です。

今年の夏は世界第2位の標高を誇るK2という山へ向かいましたが、登頂には至りませんでした。

特集
写真家 石川直樹
インタビュー



斜里町立朱田小学校の子どもたちが、ワークショップで撮影した写真

あうワークショップは、北海道だけです。子どもは大学生や大人とは違い、まだ凝り固まっているものが少ないから、写真がすくすく入る。空白の部分が多く、いろいろなものを取り入れることができる可能性を感じます。

——斜里町立朱田小学校でのワークショップは、昨年に続き2回目。全校生徒が20名に満たない小さな学校ですから、子どもたちや先生方も既に顔なじみで、今年はより密度の濃い交流となりました。

滞在中は子どもたちの家庭を訪問して、家族を撮影させてもらいました。お父さんの仕事や家の様子などを垣間見ると、その子についてより深く理解するきっかけになります。

子どもたちには、今年は通学路をテーマに撮影してもらいました。カメラを持って歩くと、見慣れた風景の中にも新しい発見がある。その意味では、通学路も冒険、つまり未知に出会う旅になり得ます。知っているつもり身の近所にも、新しい風景、新しい世界がある。



雪が多く雪崩が頻発して、あきらめざるを得なかったです。技術的に登れるという手応えがあつたので、悔いを残しています。来年もう一度、K2に挑みたいですね。

僕はあるテーマを追いかけるというよりも、偶然の出会いや直感で動いています。心惹かれて出かけ、何度も足を運ぶことによって繋がりがやターマが見えてきたりする。身体で発見する感覚ですね。これからも気軽に歩き回って、そこで出会ったものを作品にしていきたいと思えます。

石川直樹 写真展
[Across Borders]
会期 / 11月27日(金) ※午後から一般公開
11月17日(日)
会場 / 北海道博物館
札幌市厚別区厚別町小野幌5-2
011-898-0466

永続性のある社会のデザインへ
ものづくりの次代を担う人材を育てる

r

長原實・スチウレ・エンゲ 人づくり基金（人づくり一本木基金）

「長原實・スチウレ・エンゲ 人づくり基金」（愛称：人づくり一本木基金）は、長原實さんとスチウレ・エンゲさんからのご寄附をもとに北海道文化財団が創設した基金です。工芸美術やものづくり等の分野で次代を担う人たちの応援と創造活動の振興発展のため、平成27年度から、道内在住または道内出身者を対象とした『奨学援助』『海外研修支援』『顕彰』『セミナー等の開催』の4つの事業がスタートしました。



写真提供：(株)カンディハウス

デザインのロイヤリティーを地域の未来創造の基金に

長原實さんは、北海道旭川市に拠点を置く総合家具メーカー、株式会社カンディハウスの創設者です（現 取締役相談役）。旭川の家具産業にデザインという概念がなかった1963年、技術研修生として渡欧し、修業。帰国後、「世界に売れる家具を作ろう」という志を掲げて会社を立ち上げ、国内外に知られる家具メーカーへと成長させました。旭川家具を世界に広めることとなった「国際家具デザインフェア旭川」の実現にリーダーシップを発揮した人物でもあります。

「人づくり一本木基金」設立の発端となったのは、長原さんが長年、尊敬と信頼をもってお付き合いしてきたスウェーデン在住の家具デザイナー、スチウレ・エンゲさんでした。「スウェーデンの社会で生きていくにはもうお金は必要ない。これまでデザ

インした家具から発生する自分へのロイヤリティーは、地域の若者のために使ってほしい」。80歳に近づいたスチウレさんは、そう長原さんに申し出たのです。
長原さんはスチウレさんの言葉に感激し、また「スチウレさんだけに頼ってはいけない、自分にもできることがある」と考え、共に寄附する形での基金設立へと繋がったのでした。

”二つのものを長く使う社会“
それをデザインする人を育てるために

「持続可能な産業経済社会を構築するためには、デザインが重要」。一本木基金による事業の背景には、長原さんのこのような考えへの共感があります。
「産業革命以降、世界は大量生産・大量消費へと向かい、捨ててもらうことで新たな消費に繋がる仕組みが推進されてきました。けれどこのよう

な経済は22世紀まで保たないことに、誰もが気づいていきます。生産と消費を繰り返すのではなく、一つのものを修理・再生してできるだけ長く使うことが必要。そのためには機能性も大切ですが、飽きが来ないこと、鑑賞に堪える美しさが大切になります。単なるものづくりではなく、芸術性へのアプローチが必要になるんです」。さらに長原さんは、「ものづくりだけでなく、さまざまな分野、人間社会全体をより良くデザインする創造的な知恵こそが、次の時代に繋がる」と語ります。

北海道には豊かな自然環境があり、林業、農業、漁業といった人間の生命を支える産業があります。文化芸術はそこに寄って立つのではなく、これらを守り育て、持続可能な地域社会を創造する力となっていくことが期待されています。

◎長原實さんは平成27年10月8日にご逝去されました。故人の数々のご遺徳を偲び、謹んで哀悼の意を表します。



愛称「人づくり一本木基金」について

公益財団法人北海道文化財団 理事長 磯田憲一

長原實さんは創業30年を機に、「一本技」というブランドを立ち上げられました。これは、家具には適さないと言われてきたいわゆるクセのある材を、職人の技と感性とで価値ある家具につくりあげよう、というコンセプトで生まれたものです。

長原さんは、著書の中で次のように書かれています。

「本当に銘木だけが、価値ある“木”なのか
「節や割れ、こぶがあるというだけで、何故家具になれないのか」
「それでは命を託して私たちの元にやってくる“木”に申し訳ない」
「家具のために材を選ぶのではなく、その“木”が最も自分らしい美しさを表現できるように仕上げた家具をつくる、それが職人の仕事だ」

「100年生きた木の命をいただく者は、100年使える家具をつくる」。修理し、あるいは不要になった家具を引き取り、ビンテージ家具として再生する。このような考え・想いは、今後の事業のキーワードになると考え、基金の愛称を「人づくり一本木基金」と名づけることにしました。

一本の木の命を生かすこと。一人ひとりの個性を活かすこと。それぞれの一つひとつの命を大切に、北海道の将来を担う若者の学びに寄り添い、その未来を応援していきたいと願っています。

※長原實・スチウレ・エンゲ人づくり基金(人づくり一本木基金)の事業の詳細については、北海道文化財団のHPに掲載しています。



▲器はカフェで実際に使って気に入れば購入できる
▼カフェの2階にはギャラリーを併設



Column

故郷がつなぐ才能と友情 岩橋英遠、一木万寿三

日本画家の岩橋英遠と、洋画家の一木万寿三(ますみ)。2人は滝川村江部乙(当時)で共に少年時代を過ごし、画家を志しました。英遠は、前衛的な作風で院展に入選するなど徐々に評価され、特に60代から代表的な作品を多く描いています。大作(道産子追憶之巻)など、自然の風景を題材に、ダイナミックで幻想的な表現を追求しました。



岩橋英遠「北の山たち」シリーズ

万寿三は早くから頭角を表し、上京後すぐ帝展に入選、故郷の江部乙へ疎開後には北海道の洋画界をリードする存在となりました。真駒内の「エドウィン・ダン記念館」が所蔵する連作は万寿三によるものです。滝川市美術自然史館では、晩年の英遠の北海道や江部乙の風景を描いた作品、万寿三のリンゴ園や家族を題材にした作品を中心に収蔵・展示しています。2人の画家が故郷・江部乙を通じて、生涯深い友情で結ばれていたことが見えてきます。

●滝川市美術自然史館
滝川市新町2-5-30
☎0125-23-0502
開館時間 10:00~17:00(月曜・祝日の翌日休館)
入館料 一般620円(常設展示)
www.city.takikawa.hokkaido.jp/260kyouiku/05bijyutsu/sizensi.html

器も料理も、手作りの価値を

ギャラリー陶居 & cafe オルノ

ペールブルーの濃淡がゆらめく青白磁は、釉薬のたまりが作り出す美が魅力。陶芸家・大野耕太郎さんは、この濃淡の美が最も生きる文様を追及し、波のようなドレープや、ハスの花などを彫り込んだ作品を制作しています。同じ素材でも、釉薬や焼き方の違いでクリーム色になるものを、大野さんは黄瓷(おうじ)と呼んでいます。瓷は陶器の意味で、温かみを表すための独自の呼び名です。

器などの作品は自宅兼工房に併設されたギャラリーで展示・販売していますが、1階のカフェでは、奥様の淳子さんの料理が器を彩ります。パスタやピザ、サラダなど、自家菜園と近隣農家の新鮮野菜がたっぷり好評だとか。料理とともに、「実際に器を使うことで、使い勝手の良さを考えて作っていることを知ってほしい」と大野さん。手にしたとき、暮らしに寄り添う器の価値に気づくはず。

●滝川市江部乙町832-1
☎0125-75-6568
営業日 金~日、祝日 ※不定休あり
営業時間 11:00~18:00(4~9月)、~17:00(10~3月)
www.d1.dion.ne.jp/~gura_o/gallery.htm



アートの舞台となる歴史の空間

太郎吉蔵

どっしりした軟石造りの蔵を見上げると「太」の屋号が。昭和元年、酒造店を営む五十嵐太郎吉(たろきち)さんが、酒の醸造米の貯蔵倉庫として建てた蔵です。2004年、NPO法人アートチャレンジ滝川が再生し、市民を中心にアートスペースとして利用されています。軟石のほか太い梁や柱は建築当時のまま。音がこの柱に反響するため響きがよく、特にコンサートでの使用に好評です。

実は、太郎吉さんは五十嵐威暢さんの祖父にあたり、蔵は年1回、五十嵐さん主催の「太郎吉蔵デザイン会議」のメイン会場として使用されています。会議では国内外の第一線で活躍するデザイン関係者が集まって円卓を囲み、ひとつのテーマについてとことん議論。パネリストと聴衆が平等な立場で会議に参加するという世界的にもまれなこのイベントは、太郎吉蔵の薄暗い空間によって一体感が高められています。

市民、そして多くのアーティストに開放された空間は、まちの歴史・文化の拠点としてさらに長い時を越えていくに違いありません。

●滝川市栄町2-8-9
☎0125-22-7337 www.act-takikawa.or.jp



▲蔵に使用されているのは美瑛軟石と推定される
◀「かぜのび」と「COYA」は陽、「太郎吉蔵」は陰、と表現される空間



街歩きアート

都市と地域の交流点から吹く 新しいアートの風 〔滝川・新十津川〕

交通の要所として発展してきた滝川市と、奈良県の十津川村からの移民が粘り強く築きあげてきた新十津川町。この隣合う二つのまちは、石狩川流域に広がる空知エリアの中でも豊かな文化を育んできたまちとして知られており、近年も新しいアートの発信地が作られています。

故郷にアートの風を吹き込む

かぜのび ギャラリーCOYA

滝川市街から車で約20分、酒米の里・新十津川町の田園地帯の中に「かぜのび」があります。ここは、企業のロゴデザインや、JR札幌駅「JRタワー」のアートワークで知られる、滝川市出身の彫刻家・五十嵐威暢さんのアトリエ兼ギャラリーです。2011年、廃校の小学校に開館し、外観は学校そのまま。しかし入口の長いゲートをくぐった先には、まったく別の世界が広がります。

館内は白を基調とした、光と静寂を感じる空間です。壁一面の真っ白なテラコッタによる「思い出せない白の伝説」は、滝川の冬の記憶から発想した大作。作品の前では、何もかもを吸い込んでしまうような雪深い冬と同じ感覚におそわれます。樺の合板から生き物の形



◀思い出せない白の伝説>2011年(かぜのび)

●かぜのび
樺戸郡新十津川町吉野100-4 旧吉野小学校
☎090-3391-7989(風の美術館)
開館期間:5~10月(冬期休館)
開館時間:水~日および祝日 10:00~17:00
(月曜祝日のとき火・水曜休。火曜祝日のとき水曜休)
入館料:一般200円
www.takenobuigarashi.jp/ja/kazenobi/

●ギャラリーCOYA
滝川市花月町1-2-26 ホテル三浦華園駐車場内
☎090-3391-7989(風の美術館)
gallery-coya.info



2015年夏の「Between」
帰山昌子・伊賀信 2人展(ギャラリーCOYA)

をフリーハンドでくり抜いたシリーズ「こもれび」は、現在も制作中で、元体育館に数年がかりで大きな作品を設置しているところです。アトリエは公開しており、週末には五十嵐さんが在廊することもあるので、運がよければ制作の様子を見ることができかもしれません。

さらに2013年、五十嵐さんは滝川市内の老舗ホテル「三浦華園」敷地内の、元自家製パン・ケーキ工場を改装し「ギャラリーCOYA(こや)」を開廊。空知を中心に活動する若手アーティストの発表の場であり、都市ではなく地域からどんな表現ができるか、実験と発信の拠点にもなっています。こうしたアートスペースでは、「かぜのび」も含め、昔のままの建物の中に異質な空間が広がるという、クリエイティブな驚きやおもしろさを体感できます。

長くアメリカで活動していた五十嵐さんが、導かれるように辿り着いた故郷は、新しいものを生み出す可能性に満ちた、巨大なアートスペースになりつつあるようです。



103年の歴史を持つ旧吉野小学校が「かぜのび」となった

五十嵐さんの母校・滝川第三小学校にも作品が設置されている



表紙作家の紹介



まわる

高橋 あおば 画家

Aoba Takahashi

1987年 札幌生まれ
2006年 札幌啓成高校卒業
2010年 北海道教育大学岩見沢校(美術・絵画専攻 版画研究室)卒業
2012年 北海道教育大学岩見沢校大学院修了

2015年 個展「grow」CAFE ESQUISSE/札幌
幻冬舎 pontoon装画コンペティション入賞
グループ展「new point vol.12」大同ギャラリー/札幌
グループ展「ナカジブリッツ」犬養ギャラリー/札幌
2014年 個展「sign」六花亭福住店/札幌
個展「森綻ぶ」黒い森美術館/北広島
グループ展「茶廊法邑芸術文化振興会企画
6色イリュミネーション」茶廊法邑ギャラリー/札幌
2013年 個展「そのいき」さいとうギャラリー/札幌
個展「ゆきごもり」北都館ギャラリー/札幌
企画展「はがきのわ」東日本大震災被災地支援募金活動
ポストカード・プロジェクト展 CAFE ESQUISSE/札幌
六花亭主催 第四期六花ファイル選出
「SAPPORO ART MAP」展 500m 美術館/札幌

2012年 個展「nagare」北都館ギャラリー/札幌
個展「forest」ギャラリーエッセ/札幌
グループ展「Deai展」アルテピアッツァ美唄/美唄
企画展「PRAY展」リーフレットミュージズ/札幌
企画展「VS.X展」室蘭市民美術館/室蘭
北海道教育大学修了制作展出展
2010年 北海道教育大学卒業制作展出展

◎北海道文化財団アトスペース企画展 vol.27

高橋あおば 個展「bouquet」
会期:平成27年9月2日(水)~10月30日(金)9:00~17:00
休館日:土・日・祝日 ※都合により臨時休館する場合があります。
会場:北海道文化財団アトスペース
(札幌市中央区大通西5丁目11 大五ビル3F)
入場料:無料



bouquet



grow02



フォト・エッセイ ⑩
文/写真 前田 司郎 Shiro Maeda

雪は美しいだけじゃない

思いっきり、翌日に予定を入れてしまっていた。まさか飛ばないなんてことが本当にあると思っていなかったのだ。「いやあ、今日は飛ばないかも知れませんが」と、北海道戯曲賞担当の市川さんが割りとヘラヘラした感じで言う。外はものすごい雪だ。テレビで見たことある。と、ぼんやり思ったけど、前が見えないから、それがテレビドラマだったら演者さんも見えなくて、そのドラマは失敗だと思えるくらい降っている。北海道を舐めていた。いつも気候のいい時期にしか来たことなかったから、冬の北海道を舐めていたのだ。優しい人と思つて、甘えた態度をとつて、ふざけてからかいの言葉を投げかけたら、急に怒りだされたときのことを思う。そういうときは酷くびっくりして、しばらく落ち込むのだけど、北海道も急に牙を剥いてきたから、僕は落ち込んで新千歳空港の喫茶店でもうかれこれ四時間くらい待っている。羽田に向かう最終便にチケッ

トを振りかえることは出来たけど、僕の乗るはずの便は「調整中」になっている。さすがに雪は弱まってる。しかし、滑走路の雪かきが間に合うかわからないのだ。そうだ。二十一世紀だぜ。電話屋さんでロボットが売ってる時代だぜ。それでこうなのだ。いったいどれだけの苦勞を、北海道を開拓した方々は乗り越えてきたのだろうか。想像もつかないから、ここで甘いコーヒーを飲んで待つしかないのだ。



前田 司郎 (まえだ しろ) 劇作家・演出家・俳優・小説家・劇団「五反田団」主宰

1977年東京生まれ。1997年、劇団「五反田団」を旗揚げ。2004年「家が遠い」で京都芸術センター舞台芸術賞を受賞。2005年『愛でもない青春でもない旅立たない』で小説家デビュー。2007年、小説『グレート生活アドベンチャー』が芥川賞候補となる。2008年、戯曲「生きてるものはいないのか」で岸田國士戯曲賞を受賞。2009年、小説『夏の水の半魚人』で三島由紀夫賞受賞。近年はテレビ・映画のシナリオや演出も手掛け、2015年、「徒歩7分」で向田邦子賞受賞。近著に『私たちは塩を減らそう』(キノブックス)、『口から入って尻から出るならば、口から出る言葉は』(晶文社)他多数。

財団事業インフォメーション（平成27年10月～12月）

若手芸術家発表事業

●赤れんが美術館

当財団が推薦する道内の若手美術家による展覧会を開催します。

出展作家：椎名澄子（彫刻家）

藤田尚宏（彫刻家）

会期：平成27年10月30日（金）～
11月8日（日）

各日9:00～17:00

会場：北海道庁旧本庁舎
（赤れんが庁舎）2階1号会議室
（札幌市中央区北3条西6丁目）

入場料：無料

問い合わせ：（公財）北海道文化財団 ☎011-272-0501



地域文化協働事業

●地域文化コーディネーター養成講座

地域住民と音楽家が交流するプログラムの企画立案等を実践的に学ぶ講座を開催します。

講師：児玉真（（一財）地域創造プロデューサー）

宮本妥子（マリンバ・打楽器奏者）

日時：平成27年11月16日（月）17:00～18:30
11月17日（火）9:30～15:00

会場：かでの2・7（札幌市中央区北2条西7丁目）

定員：30名

参加料：1,000円

問い合わせ：（公財）北海道文化財団 ☎011-272-0501

アート体感教室事業

柴幸男 ワークショップ及び成果発表会

網走市立西が丘小学校6年生の子どもたちと柴幸男さん（劇作家・演出家）が、ワークショップを重ねて創作した演劇作品を発表します。

日時：平成27年11月7日（土）

※時間については
お問い合わせください。

会場：網走市立西が丘小学校（網走市宇原内182-1）

入場料：無料

問い合わせ：網走市立西が丘小学校 ☎0152-61-8477



アートゼミ事業

●近藤良平×笠井瑞丈デュオダンス 『正直者は笑い死に』

日時：平成27年11月7日（土）

19:00開演（18:30開場）

11月8日（日）

14:00開演（13:30開場）

会場：生活支援型文化施設コンカリーニョ

（札幌市西区八軒1条西1丁目 ザ・タワープレイス1階）

入場料：一般 前売2,500円 当日3,000円

高校生以下 前売1,500円 当日2,000円

問い合わせ：（公財）北海道文化財団 ☎011-272-0501



舞台芸術情報提供事業

●舞台芸術ネットワーク会議

平成28年度に当財団が共催する公演のプレゼンテーションと、鑑賞型事業の共同開催に向けた文化ホールと文化団体の情報交換会を開催します。

日時：平成27年11月16日（月）14:00～17:00

会場：かでの2・7（札幌市中央区北2条西7丁目）

参加料：無料

問い合わせ：（公財）北海道文化財団 ☎011-272-0501

文化交流事業（主催事業）

●北海道・韓国美術交流展

北海道の美術家12名と韓国の美術家12名による交流展を開催します。

会期：平成27年11月24日（火）～
11月29日（日）

各日10:00～18:00

会場：コンチネンタルギャラリー
（札幌市中央区南1条西11丁目
コンチネンタルビル地下1階）

入場料：無料

問い合わせ：（公財）北海道文化財団
☎011-272-0501



文化の宅配便事業

●木管五重奏団ウインドアンサンブル・ポロゴ 増毛公演

日時：平成27年12月10日（木）19:00開演（18:30開場）

会場：増毛町文化センター

（増毛町南島中町2丁目25）

入場料：無料

問い合わせ：増毛町教育委員会

☎0164-53-2427



北海道舞台塾 北の元気舞台

●演劇ユニットT☆S Project 「アガステアの葉」

臓器移植を背景にした、ドナー家族とレシピエント家族が紡ぎだす「いのち」「絆」「運命」の物語を上演します。

日時：平成27年11月7日（土）19:00開演

11月8日（日）①13:00開演

②17:00開演

※開場は各回とも開演の30分前

会場：イベントスペースEDIT

（札幌市中央区南2条西6丁目13-1 南2西6ビル地下1階）

入場料：一般 前売1,500円 当日2,000円

高校生以下 前売・当日500円

問い合わせ：演劇ユニットT☆S Project

☎090-6875-4020（高井）